

カンパチ等に寄生する粘液胞子虫 *Unicapsula seriolae* の顕微鏡検査方法の検討

保健科学課 丸山 浩幸・高橋 直人・古賀 舞香・松永 典久・中牟田 啓子
福岡県保健環境研究所 重村 洋明・江藤 良樹・世良 暢之

第 42 回九州衛生環境技術協議会

ヒラメの喫食がないにもかかわらず *Kudoa septempunctata* による食中毒と同様の症状を示す原因不明の食中毒事例が認められており、2014 年から 2015 年 11 月までに福岡市内で発生した 5 件の食中毒疑い事件について、残品のカンパチ等及び患者便を当所で検査したところ、粘液胞子虫である *Unicapsula seriolae* 虫体及び遺伝子が検出された。しかし、顕微鏡検査において、クドア通知法（以下「通知法」）では観察及び計測が困難であった。そこで、通知法で *U. seriolae* 虫体を確認した市販流通品のカンパチを検体として、顕微鏡検査方法について検討した。

試験方法は①通知法②Percoll 法 ③通知法の PBS を 0.1% Tween80 添加 PBS に、遠心 1500rpm10 分を 3500rpm15 分に変更した方法(以下「Tween80 添加法」)の 3 つとし、計測は Burkert-Turk 型計算盤を使用し、それぞれ 3 回検討してその結果を比較した。また上記採材した同部位を qPCR 法によりコピー数を測定した。

陽性検体を 3 つの方法で 3 回検討した結果、孢子数は全て Tween80 添加法の検出量が一番多く 12~32 個 ($6.0 \times 10^4 \sim 1.6 \times 10^5$ 個/g) と通知法に比べ平均 1.8 倍、Percoll 法は 1.2 倍の検出であった。コピー数は 1.1×10^7 , 7.9×10^8 , 1.6×10^9 copy/g で、コピー数と孢子数の相関は認められなかった。

また今回検討した検査方法としては、粘着除去及び遠心力を強化した Tween80 添加法が有効と示唆された。